

保育への視座(5)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

園の実情は、さまざまだが、七月上旬から中旬にかけて「プール遊び」「水遊び」と称する活動が展開されて、九月休み明けに再びこの活動が再開されているところもある。

近年、施設・設備が改善されて中には温水プールなどを使われていると夏季だけに限らず年間を通して幅広く活動ができるようになって来ている。

A幼稚園でも七月上・中旬に「プール遊び」の活動ができるように、小学校のプールを共

用したり、幼稚園児用のプールを使うなど環境が整えられている。七月の中旬のある日の五歳児Y君の活動ぶりを担任のK先生の指導記録とその報告からいろいろ学ぶことができた。そこには一日の短かい時間ではあるが、

Y君の活動過程を追ってみるとY君の活動と併行するようにまわりにいる子どもたちや担任のK先生との関係がはっきり見えて来る。

当日の朝、子どもたちはプールサイドに置かれてあった直径70cmほどの輪にゴム製の台

がついたもの五本を見つけてプールの中に運び込んで水遊びをはじめた。はじめはこの輪は水の中に入れてだけで（輪の上端が水面すれすれ程度の高さ）それを使って遊ぼうとはしなかった。しばらく泳ぎ廻っていたがYs児とH児がこの五本の輪を30〜40cmぐらいの間隔に曲線にならべて、それをくぐりぬけながら泳ぎはじめるとY君もYs児やH児の様子をじつと見ていて、同じようにくぐって泳ぎはじめた。Y君は「先生みて、みて、みてね」と言ってからスタートし、最後の輪をくぐり

終えてから顔を出して担任の顔を見る。担任は目があうと同時に「上手だね。もつとできそう。」と声をかけると黙ってにっこりする。

Ys児がこんどはU字型に並びかえるのをみながらスタートのところと並んでいたY児は、Ys児の「できた」という声をきくと同時に泳

ぎ出そうとしたがYs児に「Yちゃんぼくだよ」と声と腕で制止されて少し後にさがつて、口をすぼめるような表情をした。そして順番が来ると「先生みて」と言ってからスタートし、ゴールからさらに進んでプールの端まで泳いでいった。担任は「すごい。Yちゃんがんばったね」と言うとき黙ってにっこりする。

今度はY君が自分ひとりで輪を横・縦・横・縦・横と直線になるように置き、並べかえた。H児が、「Yくん、これやるの」と言うとき、うなずいて、両手をたくみに動かしながら身体を右、左にくねらせるようにして輪くぐりをしながら泳いで遊んだということである。

このような「プール遊び」や「水遊び」の活動を指導された先生なら何時でも、また何

処にでもある活動のように思われ、Y君が全身を使って生き生きと泳ぎながらのしくひとときを過ごしたのだということを感じとって下さると思う。私も同じように感じたのであるが、同時にこの日常ありふれた活動とその指導の中に何かもう一度掘り下げて見なおしたり考えなおしてみたいことがあるのに気がついたのでそのことを皆さんと話しよに考えてみたい。

一つは、筆者が傍点を付して置いたY児がじっと見つめているということについてである。Y君は少なくとも泳ぐということには自信があり、能力もあるように見うけられる。しかも、日常生活においてまわりの子どもとの関係はともかく、少なくとも、Ys児やH児のやっていることを「じっと見つめている」ということである。これを単純に他人への関

心を示す行動と見てしまったり、未だ積極的に他人の活動に入れない状態だと見てしまいがちで、そうかも知れないが、子どもがまわりの人や物やことがらに対して「じっと見つめる」と言うことの中身にとっても心ひかれるのである。そこには目をすえて見入っている姿がある。通り一辺な見方の時もあるが、子どもがじっと見つめる時は心を燃やしながら見ている何かがある。

「YsやHはどうする積りだろうか」「ああするののか」「速くぐりぬけてみたいがぐり抜けられるだろうか」……など感動も認識も全てが働いているように思う。「よく先生のやるのを見て」と過去の教育や指導の中で模範的・注文的な指導をしたり、それにならされて来た者こそ、もう一度この子どもの「じっとみつめる」ところに注意をしてみ、そ



のこの意味を読み解く努力が必要なように思うのである。その「じっと見つめている」姿勢の中に子どもの過去・現在・未来の全てが集約されているとも思われる。これはこのようなブル遊びの中だけにみられるものでなく、あらゆる場について言えることで、真剣そのものであり、単にまねるために見ているでもないように思われる。先生や友だちと心を重ね合わせたいという心持ちも、「じっと見つめる」中に生じているようにも思われる。「もつと違ったことではないだろうか」という活動への意欲をもやしなから「じっとみている」こともある。だから「先生、見て、見て、見てね」と言う子どもからの呼びかけにも真剣に応えなければならぬと思う。

このような感じ方、見方が、K先生には

きつとあったのだろうと思う。今一つは助言のことばの「上手だね、もつとできそう」という応答についてである。「もつとできそう」は先生の評価ではない。これは幼児の活動に対する保育者の勝手な解釈でもない。まさにY君のその時の心持ちそのものだと思う。「ひとりひとりの子どもに寄り添う」とか「子どもに即く」とか子どもへの援助についていろいろと説きもされ解かれもしているが、要は、平素、子どものさりげない「じっと見つめている」活動の中に私たち保育をするものが心をこめることができるかと言うことであろうと思う。これは日頃からの心がけと実践の積み重ねの中で身につけていかれるものだと思うと同時に、心がけや積み重ねはある訓練によっても自己の姿勢を改善し、高めて行くことができる。何かこのようなこと

が保育研修（保育者養成も含め）の中で特に不足しているのではないかと昨今強く痛感するのでこのことを取りあげてみたので是非一考していただきたい。

このことは私が幼児教育に関心を持ち、かわりをもつようになった頃から、ずっと確かめて来たことの一つでもあるが、近年、特に「受容する」とか「共感的理解」と言うことばがしばしば使われているのに出会うが、使われている方がその本質を理解され、それについての体験がなされて来ているのかと首をかしげたくなることがある。

既に、ジャーシルドという児童心理学者が「受容的態度の親」を論じたり、カール・ロジャーズという臨床心理学者が「援助的人間関係」について論じている中に、「受容」とか「共感的理解」の概念が明らかにされている。

るので、こうしたことについてここで解説をこころみるスペースもないのでそれぞれの先生方で繕っていただきたいと思います。

ただ、こうしたことばの意味するところは、実際的には把握が極めて難しいようにも思われる。しかし極めて重要なことなのでこれに対しての研修は特に必要と私は思う。性に頭で理解しようとするのではなく、折角「保育」という「子どもとの援助的關係」の中でそのことに即しながら学ばれたり、グループで人間関係についての体験学習をされることをおすすめしたい。なお「教育」とか「保育」とか「指導」についても同じだが、特に「受容」とか「理解」ということが、極めてパラドックスをふくむものであることをも心に留めておいていただきたいと思う。

（元・洗足学園短期大学）